
チョコレート・フォンデュ

ロリコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チョコレート・フォンデュ

【Zコード】

Z9480P

【作者名】

ロリコン

【あらすじ】

「うへへへ、着替え着替え」

今、着替えを求めてベッドを飛び出したボクは、来週から高校に通うごく一般的な男の子。

強いて違うところを上げるとすれば、女装に興味があるってことかな。

名前はルカ・シルバ。

そんなわけでベッドの横にあるクローゼットの扉を開けたのだ。ふと引き出しを開いて見ると、中には幾つもの女性用ランジェリー

が並んでいた。
ウホツ、いい下着
……。

ルカ・シルバのあんまりな一日

「おっ、おっ、おっ、おねえちゃんあああああんんん…」

「ううううう、朝も早くからなんといつ騒々しさなんだ、ルカ。男がそんなに取り乱すもんじゃない。お父さんは情けないぞ」

「ひつひつひつ…」

「ちっ、ちっ、違つんだよ、父さん！ これを見て！」

「な、なんだお前。そんな、フリフリのフリルで飾られたきりびやかな文物のパンツをしつかりと両手で握りしめて。まさか、俺達が知らない間に女でも連れ込んだのか？ やるじやないか！」

「まあ、ルカにも遂に彼女が！？ どんな子なの？ お隣りのルチアナちゃんみたいな素敵な女の子なんでしょう？ 誘われれば誰とでも寝るような、そんな簡単な女の子だったら、お母さん、許しませんからねっ！」

「ちつがーうッ！ おねえちゃん！ おねえちゃんが！ ボクのタンスを、かつ、勝手に文物の下着だらけにしたんだよ！ おねえちゃん！ ひどいよ！」

「あつはははあん。ルカ、あんたそれ履いてみなさいよ。きつと似合つわよー。一昨日の晩みたく、鏡に映してよく見て！」ひと言い上。」

「ヒィツー！ それは、言わない約束だったじゃないかツー！」

「ルカ！ ひょっとしてお前、女装癖があるのかつ！ まつたくなんていふことだ！ 僕は常々お前を男の中の男にするための教育を施してきた覚えは全くと言つていほど記憶にないわけだけれども。我が息子の変態的趣向に僅かな嫌悪感を抱きつつも、ほんの少しだけ興味をそそられる話じやないか。ほんの少しだけ」

「まあ、女装癖ですつて！？ ルカ、本當なの！？ も母さん、そんなんの、ほんの少しだけ見てみたい氣はするけれども、一般的倫理的に考えて、そんな変態行為はちよつと許さないわよー。まあ貴方の容姿なら女の子の格好をしても違和感ないでしじうから、仕方がないつて早々に諦めもつくなるものだけれどー」

「ヒイイツ！ 父さん母さん、そんなわけ無いじゃないか！ そんな、そんな、ボツ、ボクに限つて！ 女装癖を持つてるなんてワケが、ナナナ、ないじゃないですかツ！」

「あらあら、それはどうかしらねえ。なにこり、お父さんの息子だものねえ。ねえ、お父さん」

「おいおい母さん。食事中は、やめてくれないか。氣持ち悪くて食べられなくなつてしまつよ。せめて食後のコーヒーの時にしてくれ

れ

「ええーつ、なにこり、なんの話？ も母さん、なんのこと？.

「いや、まあ。俺もルカと同じで、若氣の至つてヤシケ」

「昔ねえ、お父さんたら、幼なじみのわたしの部屋に勝手に入り込んで、わたしの下着やフリフリのスカートを着て、姿見をうつと

り眺めながら股間をパンパンに腫らすよつた、れつきとした変態紳士だったのよ。気心知れた仲じやなければ街の警ら隊に突き出していたところだったわ。ねえ、お父さん…」

「ハハハハハ。いやあ、参つたなあ。といひ子供達にもバレてしまつたか。アハハハハハ」

「ホホホホホ。まつたくもう、お父さんつたら。わたし今でも、たまにアレが夢に出てきて、うなされるんですからね…」

「ひつひー！ なあんだ。ルカ、良かつたじやないの！ あんたの変態的な女装癖は、あんただけに原因があつたわけじやなかつたのよー。筋金入りの変態のお父さんあつての、変態の子が、あんたつてわけだ！」

「口ラッ！ ルル！ お前は実の父親に向かつて、変態だなんて、なんてことを言つんだ！ ルカに対してはともかくとして、お父さんに対するそんな口のきき方は許せんぞ！ 僕を変態だと言つているのは、母さんだけだ！」

「やうよ、ルル。ルカはともかく、お父さんにはちやんと謝りなさい。お父さんつたら、今でもストレスが溜まるし、その発散に、わたしの服で女装しようとするんだから。お父さんの熊のよつた筋肉がわたしのお気に入りのドレスを着込んだ姿を、ちょっと想像してみて『じらんなさい！ ありきたりな怪談話なんて足元に及ばないくらい、背筋が寒くなるおぞましさじやないの。少しは考えてからものを言ひなさい』

「はあーー。お父さん。『めんなれ』」

「うん。許す」

「ちよちよちよちよつー ちよつとみんな、会話の端々がおかしいんですけどー。ボクはー? ボクに対しての謝罪はつー? どうして、ともかく扱いなんだよつー? つてこいつか! おねえちゃん! ボクの下着はどうやつたんだよつー?」

「下着なら、あんた、今、ちゃんと手に持つていろじゃないの」

「ちつがーうツー。元々タンスに入つてた下着だよー。男物の、ちやんとしたヤツー!」

「そんなの決まつてるじゃない。全部捨てちやつたわよ!」

「なつ、なんだつてー!?」

「捨てたの。一度も言わせないでよ。今日せちようびの回収日でしょー? 業者が回収を終わらせていく頃なんじゃないの? 知らないけど」

「あらほんと。おかあさんがちょっと窓の外を確認してみたら、ちよびゴミの回収業者さんがやつてきて、ゴミ置き場に積み上げられた布の塊を、今まさに持つて行くと」

「おひ、おひ、おひ、おねえちゃんあああああああんんんんー!」

「いいじゃないか。いい機会だよ。ルカ。ちよつとお前に話があつたんだ。お前、来月から法都北高校へ入学する話になつていたんだが、あれ、断つたから」

「えつ？　へええつ？　な、なんですつてええええ！？」

「ちょっとルカ、あなた、そんな両手で思い切りパンツを引っ張つたら、『ムビころか生地が伸びてしまつじやない。破れでもしたらどうするの。勿体ない』

「そーよ。それ、高いんだからね。タンスのだつて、全部あなたの小遣いじゃ買えないくらい高いんだから。あたしが一つ一つ選んであげたのよー？　大切にしなさいよ」

「うきいい！　今は下着なんて、ビードつていいんだよつ！　そんな事より、お父さん！　なに言つてんの！？　今、なんて言つたの！？　ボクの、北高の入学が、無くなつたつて、そういう事を言つてんの！？」

「ああ、そのとおりだ。お前が行くのは、北高じゃなくつて、あれ、母さん、パンフレットは？　どこにしまつたつけ？」

「はいはい。ここにちゃんとありますよ。法都立総合魔術女学校。素敵ねえ。見てこの校舎。かわいい制服！　わたしも憧れたものだつたわあ。お腹の中にルルがいなければ、わたしも通つていたかもしけなかつたのよー」

「まままままつ、待つてよ！　今、女学校つて言つた？　言つたよね！？　確かに言つたよね！　なんでだよおー　ボク、男だよおおおー」

「あれ、アンタ男の子だつたつけ？　ひつひ、男の娘でしょーが！　問題ないじやない！」

「おひ、おねえちゃんああんー。」

「女装癖があるのなら問題なかろつ。お前は外見も、俺の息子だと
は到底思えないような、羨ましくも恨めしいほど可愛らしい男の娘
だからな。それに、俺の古くからの友人でもある女学校の校長は、
女装にも理解と見識のある、度量の大きなやつだ。校長本人が女装
癖を持つ変態紳士であることも、男が性別を隠して女学校に入学す
ることに何のためらいもなく了解してくれた変態的決断力の手助け
になつたことも、明言しておこつ。障害なんてなんにも無いじゃな
いか」

「うー、おとづれあわんー。」

「ルカ。いいえルカ子。法都立総合魔術女学校は全寮制のお嬢様学校よ。貴方の初めの試練は、まず完璧に女装して、それを何人にも見取られぬように日々を過ごすこと。その試練は、ひいては女学校を主席で卒業し、法都初の男性魔女の称号を手に入れるため。でもルカちゃん、それで終わってはいけないの。貴方の最終目標は、唯一無二の美貌で法都どころか世界全土を驚愕の渦に陥れ、世の女性たちの危機感を煽り立てる美のトリック・スターに成り上がることにこそあるのだからッ！　おかあさん応援してるわよ、ルカちゃん！」

「おっ、おかあああああああんんん！？」

「あんまりだ……」んなの、あんまりだよつ！ どこつもここつも、あんまりだつ！ つづり、つえん、えーんえーん、あんまりだ
よう！」

「おいおいル力。まったく、早速もつて世の中の男性たちの狩猟本

能に強く訴えかけ、彼らに搾取されるだけに存在する2・5次元世界の美少女が発する記号のような泣き声を上げるだなんて。お前はお前の魂に内包する天性の女性性をまったく無意識に利用しながら最大の効果を上げることに類まれな性能を発揮する、なんていうか、これはもう、変態的な天才だ」

「えーんえーん。こんなのは、あんまりだあ。あんまりな仕打ちだよお。えーんえーん」

登場人物紹介

ルカ・シルバ

家人が残らず眠りについた深夜、一人忍んで姉の下着やフリフリのフリルの付いたブラウスやスカートを、天性のファッションセンスで着こなし、鏡に映つた自分の可愛らしさに苛烈な精神的高揚を得るような、現代社会の歪みが生み出した変態。

ルル・シルバ

フェミニンな容姿の弟の下着を無断で全部捨て、ラブリーなフリルのデザインに定評のある有名女性下着メーカーのものと入れ替えることを趣味とする、生まれついての変態。

ルカのお父さん

野生のバッファローを連想させる雄々しく荒々しい顔つきに、ディフェンシブタックルのように巨大な筋肉で全身を飾る大男でありながら、家の屋根裏にはキングサイズの女性物のドレスや下着を隠し持つ、毎週水曜日に自分と同種の趣味を持つ男たちと秘密の女装パーティを催し、ストレス発散を試みるような、生え抜きの変態。

ルカのお母さん

幼馴染の彼が女装趣味者であると知りながら、学生時代に彼の子供を身ごもり、周囲の反対を押し切つて出産するといった挑戦者であり、自分の息子のあまりに美しい外見に心底好悦し、息子を女学校に入学させようと画策した挙句、ついつかり実現させてしまうといつた、何者にも屈しない精神を持つ変態。

ルチアナ・プラチナム

ルカくんの幼なじみ。ルカくんとは乳児の頃から家族ぐるみの付き合いをしている。ルカくんが男でありながら、女学校への入学を果たしたことを探る人物であり、ルカくんの想い人。

校長

女装趣味に傾ける情熱はルカのおとうさんに勝るとも劣らない。ネット・ショッピングではなく、自らランジェリーショップに赴き買い物することを休日の楽しみにしており、店員に試着を拒絶されることにも何ら動じることのないワンランク上の変態。

?マジエンタ・ルビー?

ルカくんのルームメイト。成長期途中にして、おっぱいは乳牛の豊満さ、くびれた砂時計の腰付きと、将来の展望輝かしいトランジスタ・グラマー。あだ名はマギ。

?エクレア・ショコラ?

魔女殺傷魔術・呪詛『チョコレート・フォンデュ』の開発者。

エクレア・ショコラの『真立て』

エクレア・ショコラは身支度を整えると、溜息をつき、ベッドにて腰掛けた。

小さなサボテンの鉢植えを乗せたナイトテーブルに視線を向ける。テーブルの引き出しに手を伸ばし、そつと開いた。引き出しには伏せられた『真立て』が、ひとつ入っている。

エクレアは『真立て』を手元に寄せると表に向けて、じっと見つめた。

エクレアの瞳の輪郭が、涙にけぶつてゆるゆると歪む。

「あんなに真剣な気持ちでお願いをしたのは、後にも先にも一度きりだったわ」

「それなのにな。どうして願いは叶わなかつたのかしら」

「どうしてかしら。ねえ、ママ。どうしてなの……」

『チヨコレート・フォンデュ』

『連れて行かないで。連れて行くのはやめて。天使たちを遠ざけて。お願ひよ。

こんなに近くにいるママを、わたしから引きはがさないで。離ればなれになんて、なりたくない。どうか、どうかお願ひだから。

もしもあなたが、わたしのお願いを叶えてくれるのならば、なんだつてします。

あなたが望むのならば、もつといい子になります。

朝も昼も夜も、あなたの名前を尊び敬つて、毎日欠かさずにお祈りします。

いたずらや口うたえもしません。勉強をないがしりにすることだけやめます。

どうかお命じ下さい。わたしはきっと、すべてやりとげてみせます。ママを助けてくださいのならば、どんなことでもします。なんだけできます。

わたしはこんなにもあなたを愛しているのよ。
なのになぜ、なぜあなたは、わたしから愛を奪おうとするの。

ひどいことをしないで。

もしあなたがママを連れていってしまったら、わたしは一体どうすればいいの？

なにより大切なものと、なにより信じられるものとを、一瞬で失つてしまふのよ？

どれほどもがいても、必死になつても、わたしはどんどん沈んでいつてしまつ。

そんな世界をどうやって生きていけばいいの？

神様。

わたしはママの手を決して離さないわ』

太陽は沈んだ。

レースカーテン越しに、夕闇の青い光が室内に充满している。

1人の少女が、母親の横たわるベッドの傍らに立ち廻くしている。母親に掛けられた清楚なシーツの端から、透きとおるほど白い手がのぞいている。少女はそれを両手で握り締めている。母親の冷たい甲を、親指でやさしくなでている。

うなだれた少女の全身は、母親よりも冷たく深い影に落ち込んでいる。少女の表情は影に隠され、窺い知ることが出来ない。部屋の扉がゆっくりと、音もなく開く。扉の隙間からオレンジ色の光が差し込んだ。少女の足元の薄青い部屋の床に、長方形をつくる。

男のシルエットが光の中に、ゆっくりと現れる。

「エクレア。おまえも、少し休みなさい」

少女は応えない。うつむいたまま、母親の手を離さない。

底冷えする空気に静寂が上塗りされる。

やがてオレンジ色の長方形は細く小さく、閉められてゆく。

部屋は再び薄闇の中へ戻された。

少女の涙がひとつずく、母親の手の甲にこぼれ落ちる。

【まえがたり】

ルカ・シルバは女学校へ進学する男の娘。家族が寝静まった深夜、忍び手に入れた姉の衣服を着飾つて、姿見の前で繰り広げる、独り乱痴氣騒ぎを、密かに愉しむ趣味をもつ、とつてもかわいい男の娘。その夜も、姉の部屋から拝借した、フリフリフリルのブラウスと、フリフリフリルのスカートの、愛らしさを散りばめた衣装に、いそしみながら袖を通し、小さな胸を高鳴らせ、たいそう心をときめかせ、ワンマン・ファッションショーに興じていた。そのさなか、ついつかり鍵を閉め忘れた自室の扉の、僅かに開いた隙間から、廊下に漏れる光の筋を、おりしも用便を足すため臥所を抜け出し、廊下をゆく姉が見とめた。漏れる明かりを目にした姉は、一体なにかと不審を抱き、静かに扉に近寄りて、弟の様子を覗き確かめると、そこにあるのは、嗚呼。なんたるちあ、サンタルチア。恍惚のチークで頬を、まことしやかに桃色に染めあげ、健やかな微笑みを姿見に映す、まごうことのない、変態の存在であった。弟の痴態を目の当たりにした姉は、寸前で繰り広げられる、讚嘆たるも惨憺な光景に心おののかせ、鞭打たれたように身をわななかせ、居ても立つてもいられずに、荒々しく扉を開け放ち、同時にその身を滑り込ませ、はつとこちらを振り返った弟の、驚きにまぶたをめくり上げた、まんまるの瞳に、指先を向けてお腹を抱えて、かなりの大爆笑をした。弟は雪とも見まちがう、真っ白な灰になり代わり、なすすべなくしてはらはらと、その場に崩れ落ちた。長いまづげを、森の草木にまといつく、澄清なる朝露のような、艶めく涙にしつとりと濡らし、その滴を頬に落とした弟の、不憫な身の上を憐れんだ姉は、今宵目にした光景は、決して他には漏らすまいと、弟の前でかたく誓い、約束を交わした。弟の涙を優しくぬぐい、弟を胸にいだいて慰めて、

姉はついに、弟の心を安らがせたのである。

『といったような出来事があつたんだけど、おねえちゃんつて生き物は大概、ボクたち弟にとつて天敵なんだ。シルバ家もその例に漏れなかつたよ。次の日の深夜、おねえちゃんはボクが寝静まつたのを見計らつて、ボクの部屋に足音も立てずに忍び入ると、部屋のクローゼットから、ぼつボクの下着を……下着を、全部、文物のパンツやブラジャーに入れ替えたんだッ！一枚も残さずに！寝ていたボクが履いていた下着まで、きつ、着せ替えたんだ！ビックリしたとか、そういうレベルじゃないんだよ！犯罪だよッ！朝起きて、下半身の違和感に、シーツとジャージをめくり上げたボクは、ボクは、頭がどうにかなりそuddたよ！でも……でも！それだけじゃないんだ！おねえちゃんは！それだけじゃなかつたんだよ！父さんと母さんには、絶対に言わないでつて、あんなにお願いしたのに！泣きながらお願いしたのにッ！早速バラしたんだよ！ボクの、じょっ、女装してたことを、笑いながら2人にバラしたんだよ！すごく嬉しそうな顔で、全部バラしたんだよ！あんまりだ。ひどいよ！ひどいよおねえちゃん！うええん。えーん、えんえん』

ナレーション「椅子から崩れ落ちると足元にしゃがみ込み、小さな子供がするように膝を抱え、ワンワンと泣き出したルカ君。つい今まで、僅かの憂いを含んでいたものの、ハキハキと受け答えしていたルカ君の、突然の変わり様に、インタビュワーの男性は表情を困惑に曇らせ、椅子から腰を浮かして、ルカくんの肩にそつと手を伸ばした。が、なにか躊躇われたようで、男性は傍らに控えている助手の女性に、助けを乞うような視線を送った。助手の女性、彼女もまた深い困惑の色をその表情に浮かべていたが、インタビュワーの男性と視線を合わせると、手にしていた黒革の装丁の手帳を、傍らの机に乗せ置き、ルカ君の隣まで歩み寄ると、音も立てずにそつと

しゃがみ込み、震えるルカ君の華奢な肩を両手に包みこむと、ルカ君の泣き声に合わせて、優しくさするのだった。彼女がルカくんにできるめいいつぱいの慰めであった

【】

「おひ、おひ、おひ、おねえちゃああああんんんーー！」

「チッ。朝っぱらから、うつせ」わねえ。男が取り乱すんじゃないよ！ あれ。なんか見たことあるわあ、この光景。既視感つていうの？」

「ふざけないでよつ！ つていうか！ だいたい想像がついてしまつているから、本当は聞きたくないんだけど、おねえちゃん！ ボクの、ふ、服が、クローゼットから全部なくなつてるじゃないか！ ビーいう事なんだよつ！」

「ああん？ 服ならあつたでしょ？」

「全部、入れ替わつてるじゃないか！ 残らず全部、女物になつてるじゃないか！ ノースリーブチュニック！ シャーリングの効いたホルターネックワンピース！ レース編みのカーディガン！ 大きなりボンが付いた「クーンスカート！ フリフリフリルのミニスカート！ フリフリの！ フリルが！ なんかフリルがたくさんあつたよ！ いつたいなんてことをしてくれたんだよつ！」

「ひやははつ、楽しそうじゃないの、ルカ！」

「楽しいわけないだろつ！」

「ハハさいなあ。ちやんとあんたのことがえて買つてきたんですけど？　あんた、あたしと違つて、貧乳だしさ。まあパッド詰めりやいいんだけど、めんどいっしょ。だから肩とか鎖骨とかを見せるトップスにしたの。あとボトムスは、あんた脚が白いし細いし、ソコンコイケるから、スカートの丈の長さとか、ほどよくフィットするパンツとか、ちやあんと見立てたワケよ。ね？　おねえちゃんもテキトーにホイホイ買つてあげるわけじゃないんだよ？　あんたの事、ちやんと考えてるんよ！」

「ちやんと考えてて、じつして弟に女物を買つてくれるんだよー！　意味が解らなーよー！」

「なによ、ルカ。あんた、自分の正直な気持ちに嘘付いたつしょがないんだからね？　女装がしたいんでしょ？　法都中の人たちに向かって、ボクは女装がしたいです！　って、泣き叫びながら告白したいんでしょ？　あんたが黙つてたつて、こないだの件で全部バレてんだからさあ。諦めなさいよ。それに、今更どうこうしたつて、女学校への入学は覆せないつつ。お母さんだけじゃなくて、お父さんも今じゃノリノリなんだから」

「ハハハ……ひどこよ。こんなのは、あんまりだよお」

「チッ。ウゼーから泣くんじゃねえつて言つてんだろー。男が泣いていいのはねえ、親兄弟が死んだ時と、黄金のコンドルを田にした時だけよ」

「グスグスン。ぜんぜん意味が解らないよ」

「ホレ、いい加減諦めて、わざわざ部屋に戻つて服を着て来なさい

よ。そしたらあんたを[写]メで撮つて、ルチアナにメールしなくちや
いけないんだから」

「ちゅー！ なに言つてんだよー！ そつ、そんな事、させむわけ
ないだろー。」

「え？ せつかくあたしが選んであげた服を、着てくれないの？」

「ふふふざけないでよー。当たり前だろ！ なんでルチアナに送ら
れるつて判つてるのに、わざわざ[写]真を撮られるつて判つてるのに、
女装しなくちやならないんだよー。」

「えー、マジ？ 困ったなあ、ルチアナも楽しみにしてるんだけど
なあ」「

「ちゅー！ 待つてよー！ 今なんて言つた！？」

「ああ、昨日ルチアナと電話してたんよ。そんで、ルカの女装の話
をしたんだけどさ、そしたら、ルチアナが見たいから[写]メ送れつて、
言つから。オッケオッケーつて」

「おー、おー、おー、おねえちやああああんんんーー。」

「え？ うわわわわー、ちゅーなによー！ なに熱くなつてんのー！
？」

「怒るに決まつてんだろー！ ルチアナに、喋つたのーー？」

「え？ [写]メ送つてあげるつて言つただけだよ？」

「女装のことを聞いたのー? 女装したボクの『真』を撮って送るって、そつこえたのー?」

「え? うん。だけれど……。動画じゃないんだよ?」

「ア! じゃなくてー。アーいう問題じゃないー。」

「『メだつて、壁紙より小さいサイズのだよ……?』

「だから、アーいう問題じゃねえって言つてだらうー。」

「あらあい、ルルちゃんルカちゃん、どうしたの? 口論の内容はルカちゃんの大きな声で、大体察しが付いているけれど。全裸であると推測される体に、厚手のバスタオルを胸元まで隠すよつて巻きつけたその姿。ルカちゃん、あなたお風呂あがりなの?」

「あ! おかあさん! 聞いてよー! おねえ、ひや、ん……が……。うわああああああああー! お! おかあさんああああんんんん! ?」

「ひやまはつ! ルカ、あんた今、一度見! お母さんを一度見して下さいー。」

「お、おおおおおおお、おかあさん……。そ、その服……ー。」

「どお? 昨日、ルカちゃんの制服が仕立て上がったから、受け取りに行つたんだけれどね。あんまり制服が可愛くって、お母さんやつぱり我慢できずに着てみちゃつたの! 似合つてしまふ? あい、やつぱり? そつなんでしょ?」

「こ、いやこやこや……似合ひとか、じゃ、なくて。その……」

「それでねえ昨晚、お父さんにも見せてあげたのよ。そしたらお父さんったら、なんだか異様に興奮しちやつてね。久しぶりにハッシュルしたわ！ あつ、大丈夫！ 制服は汚していないんだからね。ちよつとしわになつちやつたけど」

「えつと……なんて、書つたらいいのか、その。それよりも、お母さん……」

「ポニー テール……！」

「ポニー テール！ ひやはははは、ハモつたー。いやーそれにしても、お母さん。その年でポニー テールは、さすがのわたしも、ひくわあ！」

「なによー。いじやない、お母さんだつてカワイイ格好したいのつー！ ポニー テールにしたら、お肌が引っ張られて、張りがぜんぜん違うんだからー。」

「おひおかあさん……」

「ううん、それにしてもやつぱり、ルカちゃんに合わせて仕立ててもらつた制服だから、ルカちゃんよりも背の高いお母さんにとっては、ちよつと下品な膝上20センチのスカート丈だわね。でも、お母さんの脚線美が余すところなく拝観できるつてんだから、実害はないどころか、世の男性諸君にとつては良薬ですらあるわー。見てごらんなさい、あののサイズは、測つたようにぴつたんこよー。ルカちゃんの代わりに、お母さんがこれを着て学校へ通おうかしらー？」

「？」

「ひつひつー おかあさん、胸囲のサイズまでぴつたんこねー あーいひー、ここの場合は『ぺったんこ』と、表現し直すべきかしらつ！ ひやはつはーっ！」

「あらあら、ルルちゃんつたら。かつて体重3トンを超えるホッキヨクグマを一撃で屠つたおかあさんの伝説のハイキックで、おっぱいを削ぎ取られたいの？ でも今ならまだ、古来は東洋より伝わる秘技・DOG E - Z Aで、お母さんに許しを乞うチャンスを与えてあげてもよくなつてよ」

「ひつひつひ……どつここしょ、つと。おかあさん、ごめんなさい

「うん、許す。

さアル力ちゃん！ あなた、いつまでお風呂上がりの、のぼせた顔でボケツとしてるつもり？ あなたは今日、魔女学の校長先生と面談のお約束があるんだからー。さつさと部屋に戻つて、フリフリフリルのお洋服に着替えていらつしゃーー！」

「え。ええっ？ そんなの、きいてないよおおおッー？」

【あとがたり】

ナレーション「ルカ君の背後から、三人組のコメディアンのホログラムが飛び出した。コメディアンの一人、野球帽をかぶつた小太りの男が、被つていた野球帽を乱暴に掴み取ると、床に向かつて叩きつけた」

【】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9480p/>

チョコレート・フォンデュ

2011年6月27日16時46分発行